

まつぎ かみはまだ
松崎遺跡・上浜田遺跡

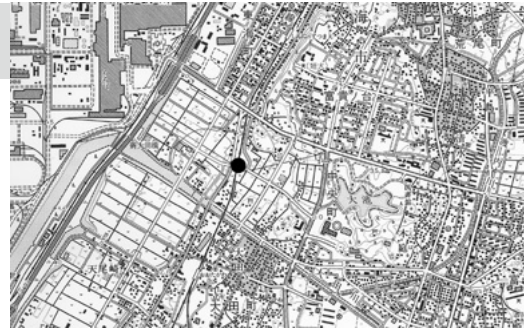
所在地 東海市大田町松崎・上浜田
(北緯35度1分35秒 東経136度53分44秒)

調査理由 連続立体交差事業

調査期間 平成24年5月～平成24年9月

調査面積 2,100 m²

担当者 永井宏幸



調査地点 (1/2.5万「鳴海」)

調査の経過 名古屋鉄道常滑線連続立体交差事業にともなう事前調査として、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて、愛知県埋蔵文化財センターが委託を受け、発掘調査を実施した。調査は、平成20年度に実施した08B区西側に隣接して2,100m²おこなった。今回の調査区は、国道247号と鉄道高架の交差する以北に展開する松崎遺跡と、C区西側に隣接する上浜田遺跡の間をつなぐ地区にあたる。調査区は全長約270m、幅7～10mを測る。細長い調査範囲のため工程上、北からA・B・C区にわけて進めた。なお、20年度調査地はすでに鉄道の高架が完成し、20年度調査当時、仮設の軌道であったところが今回の調査区にあたる。

調査の概要 調査の結果、旧海岸線に形成された砂堆と調査区南西から北西に縦断する街道とほぼ一致することが判明した。この砂堆縁辺付近に古代を中心とした遺構が削平を免れ、貝層を伴う大型廃棄土坑などがみつかった。遺物は、調査地南端のC区南側をのぞくほぼ全域から出土した。古墳時代後半期から古代までの製塩土器をはじめ、古代を中心とする須恵器・土師器が多く出土した。

調査区北半は、名古屋鉄道の軌道により削平され、包含層が一部残る程度であった。当初、遺構と判断していた茶褐色から黒褐色土層は、鉄道造成時に残存し、かつ軌道の重量により沈下した包含層であることがわかった。

調査区南半は、鉄道の軌線による影響が少なかった。旧愛知鉄道により、街道が分断されたあとも、街道の地割りに沿って宅地が並んでいたと思われる。現況の宅地の地割りと表土層から続く宅地の境界が、調査区南西から北東にのびる道路と一致することも裏付けになろう。

街道部分は、厚さ50cm前後、幅5m前後の砂質土と粘質土の互層となる硬化した整地土層が調査区を縦断している。この整地土は版築状に締め固められていた。大正11年の硬貨が土層内にあったことから、愛知鉄道開通後も道路整備が続いていたことを裏付ける。

街道と考えた部分を掘り下げると、近世陶器の混入する堆積層まで互層堆積を確認した。この街道を境に南側は湿地状の堆積層(埋め立てる前は水田として利用していた)がひろがり、現大田川にむかって窪地があったと考えられる。C区南側2/3はこの窪地に相当し、街道を境に段差があったことを地表下で確認できた。つまり、南北方向に延びる砂堆を境に西側は海域、東側は湿地状の低地といえる。この景観は08調査区からの延長であり、街道と湿地の段差によって追認できた。

B区とC区北寄りの砂堆に数カ所、貝層をともなう土坑があった。貝層は焼土や炭化物が混じる。なかでもB区南寄りに検出した貝層を伴う大型廃棄土坑090SKは、3.8×3.3mの不定形、深さ30cm前後を測る。090SKは須恵器などが出土し、奈良時代初期の遺構と考えられる。貝種はハマグリが主体で、ウミニナも含む。貝層のフローテーションを試みたが、環形動物や微小貝類は採取できなかった。090SKの底面近くには馬の下顎骨・肩甲骨などがまとまって出土した。馬の骨は既調査からも同時期の類例が報告されている。

出土遺物は、製塩土器の出土状況から偏差を指摘できる。A区北寄りには知多式1類から4類までが出土、A区南寄りからB・C区北寄りにかけては4類が中心に出土した。つまり松崎遺跡に近い地点は古墳時代の製塩土器があり、上浜田遺跡に近い地点では古代の製塩土器が中心に出土している。製塩土器のほか、奈良時代初頭前後の須恵器・土師器甕を中心に、灰釉陶器、山茶碗、鉄鏃、土錘なども出土している。(永井宏幸)



090SK 遺物出土状態



出土遺物



遺跡全景 (C区を北からみる)

写真手前中央の砂堆と住宅の軸線が一致することに注目。
宅地左側(東)の旧街道と砂堆縁辺が一致する。



C区の調査状況

砂堆の縁辺部を調査しているところ。